

帚木・空蟬・夕顔三巻の構成的意義

森岡常夫

一

桐壺の巻から帚木の巻への連絡については、早く和辻哲郎氏が問題にしたが、そこに記述されている年代に五年の空白があることは事実である。しかし紫式部が当初、年次に従って書き続けるという方針であつたかどうか、不明である。源氏の生涯について重点的に書く意図であつたのかも知れない。あるいはその空白の期間に書くべき事実がなかったというようにも考えられる。しかしその後においてもこの二巻の連絡を問題とする考え方が行われているのは、帚木・空蟬・夕顔の三巻が、桐壺・藤壺・紫上を貫く主題の世界から遊離した傍系の話であると見られることにも基づくのであるが、しかし作者がこれを主題の世界に結びつけて統一しようとしている努力を見のがしてはならない。一つにまとめ上げられている作品を分析するだけでは、その作品を理解することにはならないと思う。

桐壺・帚木両巻の連絡の問題は、先ず五年の隔たりということであるが、しかしこれは作者の省筆と考へてさして不当ではないと思う。作者は大胆な省筆を試みる人である。そして源氏と藤壺の仲は決して許されるものではなかったし、また葵上の許には藤壺のこと

があるので源氏は近づかない。更にまた桐壺の巻にみえたように、葵上の自分が年上であるという意識も障害になっているかも知れないが、大体彼女は可憐な人ではなかった。従つて源氏はこの人を抱りどころとすることはできなかったのである。かように行き詰つた源氏の心が、やがて青春の彷徨をはじめるといふことは、必ずしも不自然ではない。従つて帚木・空蟬・夕顔の世界は傍系とは言えようが、桐壺の巻からここに結びつく必然性は存するのである。そして帚木の巻は、いわゆる雨夜の品定めを中心とする。それは周知のように長雨晴れ間なきころ、宮中の物忌みが続いているしめやかな宵のことである。桐壺の巻にみえた葵上の兄蔵人の少将もこの巻では頭中将に昇進し、源氏と同じように正妻右大臣の四の君の許を住み憂く思い、今宵も源氏の宿直所を訪れたところから、話は始まるのである。ここに左馬頭、藤式部丞が訪れていわゆる雨夜の品定めが行われて、中流の女性たちを中心とした世界であるといふ意味で、桐壺とは別の世界とは言えようが、頭中将が活動していることは、極めて重要である。彼は源氏に次いで主要な男性である。父は左大臣であり母は桐壺帝の妹大宮であるから、最も高貴な人である。ここに話題として取上げられた女性たちは、中流の人々であるにちが

いないが、しかし前巻桐壺に引き続いてこの上流の男性が登場している事実を無視することはできないのである。

その夜の話は、中流女性の「思ひの外にをかしき」旨を述べ、上流階級以外にもよき人のあることを語っている。そして妻たるべき者に必要な資格を論じているのである。そして最後に恋の経験談として馬頭の語った指喰いの女・木枯の女、頭中将の常夏女、式部丞の極熱の草葉の女の話が語られている。この雨夜の品定めは、帚木の巻の三分の二に近い分量を占めているが、これについて源氏物語一部の序とする考え方があろう。ここに見える女性観は、今後源氏物語の世界に活動する女性たちに関連するところがないとは言えないが、桐壺の巻に続いてここに序を置くというのも不自然であろう。これはやはり源氏に中流女性に対する関心を呼び起こし、やがて空卿や夕顔というような中流の女性たちを引き出すための前置きとして理解すべきであろう。やや書きすぎた感もあるが、作者はかような評論的な事項にも関心があつたと考えられる。

帚木の巻の雨夜の品定めにおいて、頭中将の語った常夏の女は、やがて夕顔の巻に展開するし、その巻後半の空卿の話は直ちに空卿の巻に引き続くものである。しかし帚木の巻に空卿の話を書きながら、どうして新たに空卿の巻を立てなければならなかったかということが問題になる。しかし帚木の巻は、空卿が再びは応ぜず、源氏の諦めきれない思いで筆を止めたところに、蔀切れとして一段と印象が深められているのである。そして空卿の巻における源氏の三度目の訪問は、軒端の萩を絡まして、それだけでまとまっている。この事実だけを強調しようとする意図も、理解できるのである。かよ

うに帚木の巻を空卿の物語の途中で結んだ結果、空卿の巻は、歌物語のような効果を有していると思う。

二

次に帚木の巻の雨夜の品定め最後のところで、「君は人ひとりの御有様を心の中に思ひ続け給ふ。これに足らずまたさしすぎたる事なくものし給ひけるかなとありがたきにも、いとど胸塞る」と書いてるのは、重要なことである。これによると雨夜の品定め話を聞きながら、源氏が常に藤壺のことを考え続けていたことは明白である。藤壺に関する記述の分量は極めて僅かであるが、一夜の話の結ばれる重要なところに置かれていることを見のがしてはならないと思う。

次に紀伊守の中川の家に泊りそこで侍女たちが自分のことを噂しているのを聞いても、「思ふことのみ心にかかり給へば、まづ胸つぶれて、かやうのついでにも、人の言ひ漏らさむを、聞きついたらむ時、など覚え給ふ」とあるように、藤壺とのことが世間に洩れはしないかという思いが、源氏の念頭に上つたのである。かように一見傍系の世界のごとくみられる帚木の巻の世界も、藤壺の世界に堅く結びつけられているのである。更に紀伊守の家では、源氏が式部卿宮の姫に朝顔を奉った時の歌を、侍女たちが文句を添えて話しているのを聞いている。この姫はこの巻では全く話の筋に関係のない人であるが、やがて葵の巻や賢木の巻に至って登場し、そこでは朝顔の姫君と呼ばれているのも、この帚木の巻の記述に基づいているのである。そして桐壺帝の姪にあたるこの高貴な姫は、決して空卿

や夕顔のような中流女性の仲間ではない。後出の朝顔の巻は、この姫を中心とする物語であるが、これを玉鬘系統の巻とは誰も考えないであろう。かように朝顔の姫が先ず帚木の巻にみえることによっても、傍系の世界が主題の世界につきなご止められていることが知られる。これらの世界は、作者によって一元的に取り上げられているのである。

三

夕顔の巻の中心的な存在である夕顔は、帚木の巻の常夏の女である。そしてこの巻は先ず「六条わたりの御忍びありきの頃」と書き出されている。これは唐突のようにも思われるが、しかしこの何気なく書き出されたものが、読者の意表をついて重大な意味を持つに至ることは、源氏物語に一贯する構成の方則である。頭中将の恋の経緯談として語られた常夏の女は、その場の座興にすぎないように思われたが、それがやがて夕顔となり、更に玉鬘の物語に発展するのである。若紫の巻において病い心地の源氏を慰めるために語られた明石一家の噂が、やがて重要な物語の流れに展開する。それと同様にここに書かれている「六条わたりの御忍び歩き」は、六条御息所を意味するのであり、これがやがて秋好の物語に引き続くのである。六条御息所は、高貴な女性の一人である。この夕顔の巻では御息所という身分は明らかにされていないが、夕顔と対照されて、その人柄は明確に描かれているのである。若紫の巻で「六条京極わたり」という言い方だけが見えるのも、彼女のことを意味するかと思われるが、葵の巻に至って大いに活動しているのである。その巻で

「まことや、かの六条の御息所」と書いているのは、すでに六条御息所が読者にお馴染みであることを示している。この文が夕顔の巻を承けるものであることは、極めて明白である。若紫の巻にみえる「六条京極わたり」という書き方だけで「まことやかの六条御息所」という言い方は、絶対にできない。従って夕顔の巻は、六条御息所の存在によって、葵の巻に結びつくのである。従って夕顔の巻は、六条御息所の登場を考えるならば、中流女性の巻として切り離してしまふことはできない。帚木の巻にみえる朝顔の姫以上に、夕顔の巻にみえる六条御息所の叙述は重要である。

次に夕顔の死について源氏は、「わが心ながら、かかる筋におおけなくあるまじき心の報ひに、かく来し方行く先の例となりぬべき事はあるなめり」と思っているのであるが、「おふけなくあるまじき心」というのは、藤壺に対する思いと考えざるを得ない。従って夕顔の死は、藤壺事件の応報として意識されているのであって、これは極めて重要であると思う。すなわち夕顔の巻は、藤壺を中心とする主題の世界に深く結びついている。ここには帚木の巻において源氏が藤壺のことを思いながら、雨夜の品定めを聞いていたのと同様の意義が認められる。従って夕顔の世界も、主題の世界から切り離すことはできないのである。

次に夕顔と六条御息所の関係について言うと、源氏が六条御息所の許を訪れず、それを後めたく思いながら寝た夜に、夕顔は物におそわれるような状態で急死するのである。夕顔の死は、六条御息所の生霊を取り憑いたのではなく、源氏が「この法事し給ひてまたの夜、ほのかに、かのありし院ながら、添ひたりし女のさまも同じや

うにて見えければ、荒れたりし所に住みけむ物のわれに見入れけむ便に、かくなりぬる事、と思し出づるにもゆゆしくなむ」と言っているように、荒れたところに住んでいた魔物が、魅入ったと考えられているのである。また六条御息所の生霊が夕顔に取り憑いたというのでは、葵の巻において葵上に取り憑くという印象的な事件が二番煎じとなって、興味は索然とするであらう。従って夕顔の死と六条御息所に直接因果関係を認める旧説は、従えないのである。しかしながら六条御息所の許には疎遠になって申し訳なく思っている心の引け目に乘じて、荒れた庭に住む木魂が魅入ったとすれば、そのような意味ではそこにやはり二人の関連を認めることができるのである。

夕顔の話は、四十九日の仏事と共に結ばれるのであるが、更に空蟬が夫伊予介と共に任地に下ることが叙せられている。すなわち夕顔とは死別、空蟬とは生別であるが、一度は自己の手中に入れた人々と別れざるを得ない悲しみをもって結ばれているのである。帯木・空蟬・夕顔の三巻は、枠で囲まれ、それだけで一応まとまっていると言えるのであるが、しかしこの世界は、決して源氏物語の主題の世界から遊離したものではないのである。それはすでに指摘したように、先ず源氏の藤壺に対する思いが述べられていることによつて知られる。次に源氏の外に頭中将は、桐壺の巻の蔵人少将であるし、朝顔の噂は帯木の巻にみえ、夕顔の巻の六条御息所に至つては、夕顔と対照的に述べられているのである。要するに主題の世界とこの三巻の世界は、表裏一体をなしていると言える。

四

次に帯木・空蟬・夕顔の三巻の後の巻々への関連について考えてみたい。先ず若紫の巻に至ると源氏と藤壺の交渉は進んでいるが、これは帯木および夕顔の巻の藤壺関係の記述によつて、極めて自然なものになっている。次に帯木の巻において朝顔の噂を出しているのは、この人をやがて取り上げようという作者の意図があつてのことであらう。それを承けて葵の巻で源氏に心ひかれながらも、これ以上打ち解けるべきでないという心情を示し、そして朝顔の巻に至つて中心的な役割を果たしているのである。帯木の巻から朝顔の巻までには多数の巻々が隔てられているが、ここに至るまでに朝顔を中心として取り上げる適当な機会がなかったのであらう。そして源氏と朝顔は結ばれることなく終つたのであるが、しかしこれを誤解した紫上に重大な苦悶を与えることになっている。かような意味で帯木の巻にみえる朝顔は、彼女自身空蟬とは別の世界の人であるのみならず、かように主題の世界に深く絡んでいるのである。

次に葵の巻と須磨の巻にみえる右近尉は、関屋の巻を読み合わせることによつて、空蟬の巻にみえる紀伊守の弟であることは、明白である。この脇役の人物によつても、空蟬の巻が葵の巻や須磨の巻に関連していることは明白である。関屋の巻の叙述を除いて考えた場合、右近尉の存在は、理解できないと思う。次に夕顔の巻について考えると、この巻では六条御息所の身分関係は明らかにされていないが、その存在がやがて葵の巻の車の所争いに引き続くのである。すでに言及したように、夕顔の巻が先行するのではなく、葵

の巻における六条御息所の出現は、唐突になるのである。次に再び夕顔のような人を求める心によって引き起こされたのが、末摘花の物語である。夕顔と末摘花の二人の間には何等直接の関係はないのであるが、しかし夕顔の再来を求める源氏の心理の展開という意味では、末摘花の世界はその正統な流れであるにはちがいないのである。そして末摘花の巻を玉鬘系と考えて、紫上を中心とする主題の世界と区別する考え方のあることも、周知のことであろう。しかし末摘花の巻の結末のところ、若紫の無邪気な姿が描かれている。これは彼女が二条院に引き取られてからの生活の「こまでである。夕顔のような人をあこがれて得たのが、末摘花のように異様な姫であつたために、自らやり場のないような源氏の思いは、この可憐な若紫によって救われている。かような意味でその分量は少ないが、この「こま」の存在は、この巻の最後に置かれて重要な意義を有していると思う。夕顔の死が藤壺事件と因果的に考えられていることは、既に述べたところであるが、ここに至って末摘花の世界が若紫を取り込んでいるのである。従って末摘花の巻を玉鬘系の巻として紫上系と対照的に考えるという試みは、若紫の重要な「こま」を全く無視しているものと言わなければならない。夕顔の巻においても、その流れに立つ末摘花の世界においても、主題の世界に結びつけられて、表裏一体をなしていることは明白である。

次に夕顔という人と直接関係をもつのは、その娘玉鬘である。そしてその玉鬘を中心とする玉鬘の巻も、やはり夕顔の巻に應ずるものである。夕顔の死後、源氏は右近にその人の素性を聞いて、それが帚木の巻において頭中将が語った「常夏の女」であつたことを

知る。彼女は「山がつの垣は荒るともをりをりにあはれをかけよなでしこの露」と詠んでいるように、話題になつたときから頭中将との間に生まれた姫と切り離せない人である。源氏はそれを知つて「さて何処にぞ、人にさとは知らせて、われに得させよ」と右近に頼み、右近はこれに対して「さらばいとうれしくなむ侍るべき、かの西の京にて生ひ出で給はむは、心苦しくなむ」と答えている。かうに夕顔の死後、その忘れ形見の娘が問題になっているのである。

しかし右近はかしましく言い駭かれることを思い、また源氏は今更洩らすまいと忍んでいるので、「若君の上をだにえ聞かず、あさましく行方なくて過ぎ行く」といった状態が述べられている。これだけの関心を示している以上、これを契機として玉鬘の話が展開するのは、当然である。要するに夕顔の巻は、夕顔の再来を求める心が末摘花の巻を引き出したし、六条御息所について言えば葵の巻に連関して行くし、更に夕顔の娘は玉鬘として活動するのであつて、夕顔の巻は、三本の糸によつて後の巻々と密接に結ばれているのである。そして末摘花は異色ある脇役であるが、玉鬘は源氏中年期を彩る主要な女性である。彼女は源氏の栄華の時代にふさわしい明るい花々とした女性として造型されている。実の娘であるにもかかわらず玉鬘は夕顔の幻影を負う人ではないという趣向は、作者の意図の存するところである。かように夕顔の巻が玉鬘を導き出す契機となつていことは、構成上極めて重要である。また六条御息所は藤壺に次いで、源氏の青春期における忘れ得ない人であつた。源氏は「さるまじき事どもの心ぐるしきが、あまたに侍りしなかに、つひに心も解けず、結ばれて止みぬる事、二つなむ侍る。先づ一つ

は、この過ぎ給ひにし御事よ」(薄雲)と六条御息所のことをその姫斎宮女御(秋好)に語りかけて、他の一つ(藤壺)は言うのを止めてしまふのである。更に六条御息所の姫のことがみえるのは、巻の巻に入つてであるが、この人の存在によつて、六条御息所は更に思い出の対象になつていふように思われる。源氏は秋好に対する自らの思いを抑えて冷泉院の後宮に奉つたのであるから、そこに葛藤は起こらなかったが、御息所と秋好、葵上と夕霧の母子は、それぞれ対照的に考えられている。そして藤壺の巻において「大臣は、中宮の御母御息所の、車押しさげられ給へりし折のことと思し出でて『時による心おごりして、さやうなる事なむなき事なりける。こよなく思ひ消ちたりしも、欺き負ふやうにて亡くなりなき』と、その程は宣ひ消ちて、『残りとまれる人の、中将はかくただ人にて、わづかになりのはるめり。宮はならびなき筋にておはするも、思へばいとこそあはれなれ』と書かれていふように、源氏は六条御息所の方に好意的であるようにみえるが、ここには現在の中宮である秋好の存在が大いに与つていふように思われる。源氏物語の中でも最も高貴な世界に住する六条御息所が、夕顔の巻の冒頭に見えることは、注意すべきことである。かように常木以後の三巻には、朝顔・六条御息所・玉鬘ら今後の巻々で活動する人々を準備するという役割も認められる。それぞれの巻々だけにこだわつて、中流女性の世界ということだけを強調するのは、一面的な見方であらうと思う。

更に朝顔の巻末において源氏が藤壺を夢に見たのは、印象的な場面であるが、その夢の中の藤壺は、源氏が秘密を洩らしたことを恨

んで不興なおもちであつた。しかし源氏はその秘密を洩らしたことはなかったし、また洩れていない筈であつた。これはこの秘密を絶対に洩らしてはならないという思いが、常に源氏の心の底にあつて、かような夢となつたと思われる。従つて常木の巻の紀伊守の中川の家で、源氏はその侍女たちが自分の噂をしているのを聞いたところで、「思す事(こと)のみ心にかかり給へば、まづ胸つおれて、かやうのついでにも、人の言ひ漏らさむを、聞きつけたらむ時、など覚え給ふ」と書かれていることには、すでに言及したが、源氏のかような心理が、隠微の中に夢にあらわれた藤壺のことばに響いていふと考えられる。また若菜の巻に明石上の噂が初めて見えるのであるが、明石上も中流女性という意味で、やはり気分の通い合うもののが認められると思う。

要するにここには常木・空蟬・夕顔三巻の源氏物語全体の中における構成上の関連を論じたのであるが、この三巻の存在によつて、源氏・藤壺の交渉の展開を側面から推定することができるのは、最も重要である。あえて輝く藤壺の巻を必要としないのである。